

<第1回> フォーラムレポート

対話フォーラムあいち

こどものいのちの安全と未来をまもる

開催日：2026年4月25日（土）

会場：東海国立大学機構 Common Nexus LOAM HALL



主催：いのち・からだ・こころネットあいち（IKOKO あいち）



協力：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

報告日：2026年5月25日

はじめに

本報告書は、いのち・からだ・こころネットあいち（IKOKO あいち）が、2026年4月25日に名古屋市にて開催した「こどものいのちの安全と未来をまもる 対話フォーラムあいち（第1回）」の記録として、当日の内容や対話から生まれた気づき、今後に向けた課題と可能性をまとめたものです。

第1回フォーラムには、教育・医療・行政・警察・福祉・企業・大学・市民団体・若者など、多様な立場の皆さまにご参加いただきました。子どもたちのいのちの安全、からだところの尊厳、そして未来を守るために、立場や専門分野を超えて語り合う場となりました。

とりわけ、子ども・学生たちが大人と対等な立場で自らの言葉を発し、社会への提言を行ったことは、本フォーラムの大きな意義のひとつです。子どもや若者を「守られる存在」としてのみ捉えるのではなく、未来をともにつくる主体として迎え入れることの重要性を、参加者全体で共有する機会となりました。

本フォーラムは、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン様のご支援を受けて開催いたしました。また、ご登壇・ご協力いただいた皆さま、ご参加いただいた皆さま、準備段階から力を寄せてくださった関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

IKOKO あいちは、今回の対話を出発点として、子どもたちのいのち・からだ・こころの安全を地域全体で支える「あいちモデル」の構築に向け、今後も第2回・第3回フォーラムへと歩みを進めてまいります。

この報告書が、当日ご参加くださった皆さまにとっての振り返りとなるとともに、これからこの取り組みに関心を寄せてくださる皆さまにとって、IKOKO あいちの願いと歩みを知っていただく入口となれば幸いです。



エグゼクティブサマリー



開催結果ハイライト

参加申込（総計）	満足度（5段階）	第2回参加意向	紹介したい
約 280 名	4.77 / 5	95%	94%
現地出席者約 100 名 / オンライン参加者約 50 名 / アーカイブ申込約 110 名	最高評価（5点）81%	関心ある層を含む	ぜひ+したい

主な成果

- 初回開催にもかかわらず、現地約 100 名（うち学生約 30 名）・リアルタイムのオンライン聴講約 50 名の出席を確認。アーカイブ申込を含めると当該イベントへの総計申込者数は 280 名と、想定を大きく上回る参加を得た。
- 教育・医療・行政・警察・福祉・企業・大学・市民・若者と、当初目指した多分野の参加者構成が初回から実現した。
- 中高生・大学生が主体的に意見表明を行い、大人と対等な立場で「親・先生・行政・自分たち」への提言を作成・発信した。
- 文部科学省、愛知県警、名古屋市、名古屋市教育委員会、千葉市・富士見市の先進実践者が同じ場で議論する、行政横断的な対話が成立した。
- 事後アンケートにおいて、95%が第2回参加に関心を示し、54%が事務局への連絡を希望するなど、ネットワーク形成の手応えが得られた。アンケート回収数の多さにも注目したい。

1. 開催概要

プログラム名	こどものいのちの安全と未来をまもる 対話フォーラムあいち (第1回)
テーマ	デジタル社会における依存・性暴力について考える
日時	2026年4月25日(土) 10:30～16:30
会場	東海国立大学機構 Common Nexus (ComoNe) LOAM HALL (名古屋市千種区不老町)
実施形式	ハイブリッド形式(現地会場+オンライン配信)
参加費	無料
参加者数	現地参加 約100名(うち学生約30名) オンライン参加 約50名 アーカイブ申込 約100名 申込者総計 280名
昼食提供	会場参加者向けに無料ランチ(弁当)を提供
告知ページ	https://ikokoaichi20260425.peatix.com/
事後アンケート回収	120件
主催	いのち・からだ・こころネットあいち(IKOKO あいち)
事務局	femUniti 株式会社
協力	公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

2. 開催目的・背景

2-1. 開催目的

本フォーラムは、社会変化が激しい現代を生きる子どもたちのいのちと安全を守り、子どもや若者たちが周囲の人々と互いを尊重し合いながら、新しい時代を生きる力を育むことのできる社会環境を、地域全体で共に考え、つくり上げていく足掛かりとすることを目的として開催しました。

特に重視したのは、「子どもも大人も対等な立場で話し合う」場をつくることです。子どもの命と安全を守る環境づくりは、行政や学校だけに負担を集中させるのではなく、医療・教育・福祉・企業・市民・若者自身が責任と役割を分かち合いながら進めるべきテーマであるという認識のもと、本フォーラムを企画しました。

また、考え方の基底として、自己と他者の尊重、多様性理解、人権意識を含む「包括的な学び」が、すべての子どもにとって必要であるとの認識に立っています。本フォーラムを通じて、こうした考え方を広く社会に問題提起することも目的のひとつとして位置づけました。

2-2. 開催背景

従来から存在してきたいじめや子どもを巻き込む犯罪は、近年のデジタル化により一層複雑化し、大人の中から見えにくくなっています。SNS やオンラインゲームを介した人間関係トラブル、性暴力、盗撮・画像拡散、闇バイト、インターネット依存など、子どもたちを取り巻く課題は、保護者世代が経験したことのない環境のもとで急速に拡大しています。

そうした状況に対して、保護者や教育関係者・行政担当者の多くは、対応に戸惑い、孤立しがちな現実があります。一方で、医療現場や草の根の支援活動、企業や女性起業家による実践など、現場での取り組みは積み重ねられているものの、相互の連携が十分に図られていない現状があります。

こうした背景を踏まえ、立場の異なる多様な主体が一堂に会し、知見と経験を共有し、対話を通して相互理解を深める場として本フォーラムを企画しました。2026年度は全3回の連続フォーラムとして実施を予定しており、第1回では「デジタル社会における依存・性暴力について考える」をテーマとしました。

2-3. 愛知・名古屋という地域における意義

愛知・名古屋は、性教育や子どもの人権教育に対して全国的にも慎重な土壌をもつ地域です。本フォーラムは、特定の用語や枠組みを正面から押し出すのではなく、保護者・教育現場・行政が危機感を共有しやすいデジタル性暴力や「いのちの安全」「人権」の視点から出発し、段階的に学びの幅を広げていく地域戦略をとっています。

この第1回フォーラムは、その出発点として位置づけられるものであり、将来的に「愛知モデル」として全国に発信できる地域連携の基盤づくりを志向しています。

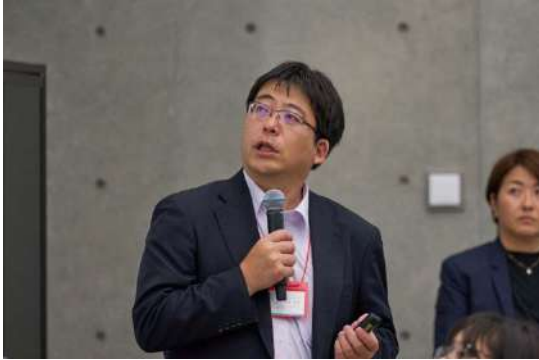
3. プログラム

時間	内容	登壇者・テーマ
10:30 - 10:45	開会あいさつ	文部科学省 中園和貴氏 プラン・インターナショナル・ジャパン 長島美紀氏
10:45 - 11:30	基調講演	河野荘子氏（名古屋大学大学院 臨床心理学教授） 『「つながりたい」が危ないとき — SNS 時代の女子非行と性被害 —』
11:30 - 12:00	午後プログラム案内/ 研究報告	竹内和雄氏（兵庫県立大学環境人間学部教授） 大橋渉氏（愛知医科大学臨床研究支援センター准教授）
12:00 - 13:00	ランチ交流会	TOMO Caffe 早川友子氏 Dragon Brewing 杉本有優氏
13:00 - 13:30	実践報告「生命（いのち）の安全教育」	千葉市の事例：池畑博美氏（NPO 法人虹色のたね理事長） 富士見市の事例：櫻井裕子氏（さくらい助産院代表）
13:35 - 15:10	学生パネルディスカッション	ファシリテーター：竹内和雄氏 中高生・大学生によるパネリスト登壇
15:10 - 15:15	愛知県警少年課あいさつ	中森良則氏（愛知県警少年課課長補佐）
15:15 - 16:20	メインパネルディスカッション	テーマ「デジタル社会における性暴力予防啓発について」 子どもたち及び学生 30 名 名古屋市教育委員会・津田淳一郎氏 名古屋市子ども青少年局・佐々木律子氏
16:20 - 16:30	閉会	IKOKO あいち代表 伊藤加奈子

4. 当日の様子

4-1. 開会あいさつ

文部科学省「生命（いのち）の安全教育」担当の中園和貴氏より、本教育の概要説明と、全国の学校での実施を推進したいとの考えが共有されました。続いて、本フォーラム協力団体であるプラン・インターナショナル・ジャパンの長島美紀氏より、生命（いのち）の安全教育の全国実施率が45%にとどまる現状に触れ、「すべての人がこれを学ぶことが暴力を防ぐために不可欠である」とのメッセージが寄せられました。



4-2. 基調講演

『「つながりたい」が危ないとき — SNS 時代の女子非行と性被害 —』

講師：河野荘子氏（名古屋大学大学院 臨床心理学教授）

臨床心理学・非行犯罪心理学を専門とする河野氏より、デジタル社会における子どもの性被害の現状について、心理学的視点からの解説がありました。河野氏は、SNS やインターネットは「ツール」として介在しているにすぎず、それ自体が原因ではないこと、したがってツールを取り上げたり禁止したりするだけでは解決にはつながらないことを指摘しました。

そのうえで、子どもたちを守るために必要な要素として、自己肯定感の育成、相談できる大人の存在、親や教師など大人との人間関係の構築、コミュニケーションスキルの獲得などを挙げ、子どもが被害にあった場合や相談しようとしてきた場合の大人がとるべき対応についても助言がありました。

「子どもは大人の姿を映す鏡」「リアルな関係を大切にすべき」との言葉で締めくくられ、会場には深い納得感が広がりました。



4-3. 午後プログラム案内および研究報告

元中学校教諭で生徒指導経験のある竹内和雄氏から、午後の学生パネルディスカッションの趣旨が共有されました。「子どもの生の声を聞く」「その声をもとに大人がとるべき施策を考える」ことを目的とし、年齢や個人の考え方にかかわらず、誰もが平等に発言できる場をつくるという前提条件が確認されました。

続いて大橋渉氏より、過去40年間の報道記事を解析した子どもと性暴力に関する研究結果が報告されました。

- 被害者の年齢層（乳幼児・小学生など）によって被害の特徴に違いがあること
- 年代別に必要な予防策が異なること、具体的方策の提言
- 台湾における学校施設での防犯カメラ導入事例の紹介
- 現代の性犯罪に使用される盗撮機器の現物展示

展示された盗撮機器は、ペットボトル、置時計、USB充電器などに偽装された極めて発見困難なものであり、参加者からは大きな反響がありました。会場の子ども参加者からは、防犯カメラの設置について「犯罪防止のためには必要」「教室にあると監視されているように感じる」など、率直な意見が出されました。



4-4. ランチ交流会

会場のランチ提供を担当した星ヶ丘のTOMO CAFFE オーナー・早川友子氏より、食を通じた地域活動と教育、食の大切さを伝えるための事業への思いが紹介されました。

また、私立東海中学・高校の教員たちが起業したクラフトビール醸造事業「Dragon Brewing」代表の杉本有優氏からは、次回フォーラムのテーマである「キャリア形成」に関連し、「大人自らが挑戦する姿を子どもに見せたい」との思いが語られました。



4-5. 実践報告「生命（いのち）の安全教育」

「生命（いのち）の安全教育」を公立学校で展開し成果を上げている千葉市と埼玉県富士見市の事例について、現場の実施担当者より報告がありました。

【千葉市の事例】 池畑博美氏（NPO 法人虹色のたね理事長）

過去に起きた教員による性暴力事件を受け、千葉市教育委員会と民間団体が連携して教員向け研修プログラムを作成したことを皮切りに、約5年にわたり公立学校で「生命（いのち）の安全教育」を実施してきた経緯と成果が報告されました。

成果として特に強調されたのは、この教育を実施したことで「性暴力事案が表面化するようになった」という点です。

「この教育をやったからこそ表沙汰になった。やってよかったと思ってほしい」

— 池畑博美氏

また、郵便代無料の手紙形式で子どもが悩みや相談を投書できる「にこにこ安全サポート」という相談システムが紹介されました。「深刻な事案が解決に導かれたケースもある。知らない人だけど安心して相談できる大人がいると信用して、書いてきてくれている」との報告がありました。



【富士見市の事例】 櫻井裕子氏（さくらい助産院代表）

埼玉県富士見市、主に市立富士見西中学校で実施されている「いのちの授業」について、助産師の櫻井氏より報告がありました。包括的性教育に近い、自尊感情を高める内容を扱っていること、「歯止め規定はあるが、教えるはいけないことにはなっていない」という認識のもと、避妊やコンドームの歴史・効果について児童が探究し発表を行っていることが紹介されました。

希望者には実物のコンドームを手に取り人形に装着する場も提供しているとのことで、「生徒には偏見がなく、まじめに学んだ」「生徒たちは、自分たちの関心に応じてアシストしてくれる大人を信用する」と話されました。実施した地域でクレームはなく、満足度98%以上のアンケート結果が得られているとのことです。

生徒の声として紹介された次の言葉は、会場に強い印象を残しました。

「知らない方がもっと恥ずかしい」

— 富士見西中学校 生徒

さらに櫻井氏は、性暴力の加害者臨床における包括的性教育も担当していることに言及。「正しい情報を学ぶ場がなく、ポルノなど真偽不明の情報を真に受けて、無自覚に暴力を身につけていく」と、加害者側の課題も提起されました。



4-6. 学生パネルディスカッション

竹内和雄氏のファシリテーションのもと、中高生・大学生をパネリストとしたディスカッションが行われました。ハイタッチ、じゃんけん、アイスブレイクを取り入れた場づくりにより、学生だけでなく大人も一緒に笑い、会場の空気が一気に和らぐ時間となりました。

序盤は、データをもとにデジタル空間に生きる子どもたちの現実について事実確認が行われました。「何歳からインターネットを使っているか」「携帯電話の所持率は学年別でどの程度か」「毎日ネットに接続する子の割合は」といった問いにクイズ形式で答えながら、逐次「どう思う?」「どうしたらいいと思う?」と竹内氏が会場に投げかけました。

さらに、ランチタイムに学生参加者約30名を対象にGoogleフォームで実施したアンケート結果が共有されました。「ネットで知らない人とやり取りしたことがある人」「ネットで卑猥なことや脅しを言われるなどして嫌な思いをしたことのある人」などの設問に対する回答は、社会問題が会場内の子どもたちの実感としても反映されていることを示すものであり、大人参加者は衝撃を受けた様子でした。

子ども・学生から出された主な声

- 「自分のことがどうでもいいと思えた時、会ってみてもいいかと思うことがある」
- 「ネットは悪影響があるかもしれないが、ネットという居場所があって救われる面もある」
- 「デジタルネイティブじゃない世代が一律に、危険だから禁止っていうのは抑圧だ」
- 「ネットでもリアルでも、いい人はいい人」

最後に、子どもたちは「親」「先生」「行政」「自分たち自身」に対する提言シートを作成し、続くメインパネルディスカッションでの発信に備えました。





4-7. 愛知県警少年課あいさつ

愛知県警少年課課長補佐の中森良則氏より、SNS等を介した子どもをめぐる犯罪に対する警察の取り組みが紹介されました。取り締まりの強化に加え、サポートセンター救援隊として少年補導職員による啓発活動を行っていること、そして「一番大切なのは児童の発するサインを周囲の大人が気づいてあげること」と話され、本フォーラムの目的との共有が強調されました。



4-8. メインパネルディスカッション

テーマ：「デジタル社会における性暴力予防啓発について」

登壇者は、IKOKO あいち代表・伊藤加奈子、文部科学省・中園和貴氏、名古屋市教育委員会教育支援部学校保健課長・津田淳一郎氏、名古屋市子ども青少年局保育部担当課長・佐々木律子氏、千葉市・池畑博美氏、富士見市・櫻井裕子氏に加え、学生代表が登壇しました。

まず各登壇者から、学生パネルディスカッションを受けての感想が述べられました。「子どもたちの生の声に感動した」「世代間で異なる考え方を知ることができた」「リアルな人間同士の信頼関係の大切さに共感した」などの声が共有されました。

続いて、子ども・学生たちが作成した提言が共有されました。

親への提言

「大人の理想を押しつけないでほしい」

「大人だってスマホばかり見ていないか？」

「子どもが悩みを相談しようとしている時は、まずは否定せずに話を聞いてほしい」

先生への提言

「トラブルを隠蔽しないでほしい」

「先生に言ったら学年集会が開かれてしまうから言いたくない」

「いつも命令口調の先生や怖い先生には相談できない」

「先生を信用して相談したのに、ほかの先生に共有されてしまうのが嫌」

「先生を信用して相談したのに、他の先生に共有されてしまうのが嫌」との声に対しては、問題解決のために情報共有が必要な教師側の論理と、生徒側の思いとのバランスをどう取るかについて活発な議論が交わされました。

行政への提言

「授業に iPad を導入しすぎないでほしい。みんな授業中にゲームをしている。紙の教科書で勉強したかった」

「法案などを作る際には小中高校生の意見も聞いた上でやってほしい」

「学校によってネットリテラシーや性教育を学んだ子とそうでない子が出ない方がいい。シンプルに全校でやればいい」

自分たち自身への提言

「大人を敵視せずに頼ってもいい。大人に分かってもらうためには、こちらから発信することも大切」

「友だち関係で、せっかく対面で会っている時にスマホばかり見ないでほしい」

「子どもと大人の間にいる存在として」と語った大学生は、

「傍観者にならず、子どもと大人の媒介者になりたい」 — 大学生パネリスト

と発言し、会場から大きな拍手を受けました。また別の学生からは「性教育を茶化させない。大人の態度が子どもにそうさせていると思う」との発言もありました。

子どもたちの意見表明を受けて、パネラーと会場参加者からは「学ぶべきは大人の方だと感じた」「『媒介者になる』というフレーズを自分もこれから使わせてもらいたい」「大人としてグサッとくる言葉がたくさんあった」といった感想が寄せられました。





4-9. 閉会

竹内氏は「スマホでの問題は、心の問題。ネットが悪いんじゃない」と示唆し、最後にIKOKO あいち代表の伊藤加奈子より閉会のあいさつが行われました。

「私たちはもっと子どもたちの力を信頼しなきゃいけないと感じた」

— IKOKO あいち代表 伊藤加奈子

次回開催に向け、「『生きる力を育てる』とはどういうことなのだろう。学校現場だけにお任せでなく、私たちができることは何なのか考えていきたい」と意気込みを述べ、第1回フォーラムは閉会しました。



5. 参加者アンケート結果（ハイライト）

第1回フォーラム終了後、参加者を対象に事後アンケートを実施しました。回答数120名（現地83名/オンライン37名）からの主要な結果は以下のとおりです。

5-1. 全体満足度

満足度平均	最高評価（5点）	4点以上
4.77 / 5.0	81%（97名）	96%（115名）

5-2. 参加者属性

属性（上位）	人数（比率）
中学生・高校生・大学生	23名（19%）
NPO・市民団体	19名（16%）
医療職	17名（14%）
教育委員会・行政	10名（8%）
保護者・市民	9名（8%）
愛知県外・海外からの参加	32名（27%）

愛知県外からの参加が27%にのぼり、当初想定を超える広域からの関心が確認されました。本フォーラムの「愛知モデル」としての展開可能性を示す結果と言えます。

5-3. 印象に残ったセッション（複数回答）

セッション	回答数（比率）
メインパネルディスカッション	81名（68%）
学生パネルディスカッション	78名（65%）
基調講演：河野荘子氏	74名（62%）
いのちの安全教育 実践報告	70名（58%）
盗撮機器展示・大橋氏報告	45名（38%）

メインパネルディスカッションと学生パネルディスカッションが特に強い印象を残した結果となりました。本フォーラムが重視した「子どもの声を起点とした対話」の意義が、参加者にも明確に受け止められたことを示しています。

5-4. 第2回への関心・継続意向

項目	回答比率
第2回フォーラムに関心がある（とても+関心）	95%
第2回・第3回フォーラムに参加したい	82%
自分の職場・学校・団体に紹介したい	41%
事務局への連絡を希望する	54%
組織として連携に関心がある	63%
情報発信・広報で協力したい	24%
運営スタッフ・ボランティアとして協力したい	20%

95%が第2回への関心を示し、54%が事務局への連絡を希望するという結果は、初回開催としては極めて高い継続意向と言えます。本フォーラムを起点としたネットワーク形成の手応えが、定量的にも確認されました。

5-5. 参加者の声（抜粋）

自由記述では多数の感想・メッセージをいただきました。代表的な声を以下に抜粋します。

- 「子どもたちのリアルな声が聞けた。大人の私たちも深く反省しています」 — 支援者
- 「こんなに多くの方が性教育を頑張りたいと思っていると知った。変えられると感じた」
— 市民
- 「多業種・大人子ども交ざって参加できる形、今後も発展してほしい」 — NPO
- 「SNSは繋がる道具ではなく、孤立や孤独を深める道具になる — 改めて考えさせられた」 — 保護者
- 「大学生として大人と子どもの媒介者になれると実感。自分が何をできるか考えたい」
— 大学生
- 「今回は加害者側の保護者として参加。性教育があれば子の人生も変わったと思う」 — 保護者
- 「一方的な研修より相互方向でとても良かった」 — 教育関係者
- 「多世代が対等に語り合える素晴らしい機会をありがとうございました」 — 参加者

特に印象的だったのは、加害者側の保護者として参加した方からのメッセージや、警察官として被害者支援に携わってきた方からの賛同の声など、当事者性をもって本フォーラムを受け止めていただいた感想が多数寄せられた点です。

6. 成果

第1回フォーラムの主な成果は、以下のとおりに整理できます。

6-1. 参加者構成における成果

- 初回開催ながら現地約100名・オンライン約50名・アーカイブ申込約100名と、当初想定（リアル50名／オンライン30名）を大幅に上回る参加を得た。
- 中学生・高校生・大学生が参加者全体の19%を占め、目的とした「若者の主体的参加」が初回から実現した。
- 医療・NPO・教育委員会・行政・保護者・市民・大学生など、目指したマルチステークホルダー構成が初回から成立した。
- 愛知県外からの参加が27%にのぼり、地域を越えた関心が確認された。

6-2. 内容面での成果

- 文部科学省・愛知県警・名古屋市・名古屋市教育委員会・千葉市・富士見市の先進実践者が同じ場で議論する、行政横断的な対話が成立した。
- 学生パネルディスカッションを通じて、中高生・大学生が大人と対等な立場で意見表明し、「親・先生・行政・自分たち」への提言を作成・発信した。
- 『傍観者にならず、子どもと大人の媒介者になりたい』という大学生の発言に象徴される、新しい世代の主体性が可視化された。
- デジタル性暴力という入口テーマから、自己肯定感・相談できる大人の存在・包括的な学びへと、議論を段階的に深めることに成功した。

6-3. ネットワーク形成における成果

- 事後アンケートにおいて、第2回への関心95%、参加意向82%、紹介意向94%という極めて高い継続意向を得た。
- 事務局への連絡希望者が54%（57名）にのぼり、組織として連携に関心を持つ参加者も63%に達した。これにより、本フォーラムを起点とした実質的なネットワーク形成の土台ができた。
- 名古屋中央児童相談所、名古屋市・富士見市の教育委員会、愛知県議会、複数のNPO、藤田医科大学・南山大学、学生団体、助産院、議員、ジャーナリストなど、多様な領域からの連携希望が寄せられた。

6-4. 広報・発信面での成果

- Peatixを通じた告知が広く拡散し、無料開催にもかかわらず当日キャンセルがほぼゼロという高いコミット率を得た。
- 代表・伊藤加奈子による開催レポートがnoteで発信され、本フォーラムの理念と当日の様子が広く共有された。
- アーカイブ申込が約100名にのぼり、当日参加できなかった層への情報提供基盤が整った。

7. 課題・改善点

初回開催を通じて明らかになった課題と、第2回以降に向けた改善方針は以下のとおりです。回数したアンケート120件からも見えてきたことを共有いたします。

7-1. 会場キャパシティ

当初、会場定員を50名と設定して募集を開始したところ、3日間で満席となり、急遽追加席を設けて約100名規模に拡大しました。参加費無料での当日キャンセルリスクが高いにもかかわらず、キャンセルはほぼ発生せず、本テーマに対する社会的関心の高さがうかがえました。

【改善方針】 第2回・第3回は会場はスペースが広く取れるため、立ち見などを招き入れるなど、可能な限り多くの参加希望者を受け入れる体制を整えます。

7-2. オンライン配信

ライブ配信において、複数回にわたり通信トラブルが発生し、音声・映像が断絶する場面がありました。また、配信画質に関して「投影資料が見えにくい」との指摘が複数寄せられました。

【改善方針】 第2回は対話を重視することを考えていますので、リアル参加とアーカイブ配信を重視します。また第3回については配信機材・回線の見直し、配信エンジニアの増員を検討します。あわせて、資料がある場合はオンライン参加者への事前資料配布（PDFデータ）を検討します。

7-3. 会場運営

会場後方での工事音、スタッフの会話が聞こえてしまう、配布資料を希望する声があったなど、運営面での改善要望が複数寄せられました。

【改善方針】 当日のスタッフ動線・配置の見直し、配布資料の事前準備、テーブル設置の工夫など、参加者の集中環境を確保する運営マニュアルを整備します。

7-4. ファシリテーション・話し方

ファシリテーションについて、「対等な対話の雰囲気良かった」という高評価が大多数である一方、「肩書きを過度に強調する場面があった」「子どもへの問いかけに圧があると感じた」など、対等性の理念をより徹底すべきとの指摘も一部寄せられました。

【改善方針】 本フォーラムの根幹である「対等な対話」の理念を、登壇者・ファシリテーター・運営スタッフが共有するためのブリーフィングを強化します。

7-5. プログラム時間

「6時間という長丁場は集中力の維持が難しい」「子育て中の参加者は1日確保が困難」との声が一部寄せられました。一方で、「内容が濃く、長時間でも充実していた」という肯定的な声も多数ありました。

【改善方針】 第2回以降は、半日参加・午前のみ参加など、柔軟な参加形態を検討します。アーカイブ配信の活用と組み合わせ、参加機会の多様化を図ります。

8. 次回・今後の展開

8-1. 第2回フォーラム

開催予定日	2026年7月29日(水)
テーマ	「生命(いのち)の安全教育からつながる生きる力を育む教育とキャリア教育」
方向性	性教育を知識面のみならず、自分と他者の身体や尊厳を大切にする価値観、究極的には自らの生き方を自分で決めていける力を養う教育として捉え、キャリア形成にまで意識を延ばして対話を行う。リアル会場での対話とネットワーク作りを重視します。

第1回で見た「子どもの声を起点とする対話」という形式を基盤としつつ、「守る教育」から「育てる教育」へと議論の射程を広げていきます。

8-2. 第3回フォーラム

開催予定	2026年11月予定
テーマ	セーフガーディング(子どもの安心・安全を守る仕組み)づくり
方向性	企業・地域・居場所におけるセーフガーディングの仕組みを、行政・市民・若者と協働で構想する。愛知・名古屋発の「セーフガーディング宣言」の検討に着手する予定です。

9. メディア取材

フォーラム翌日の4月26日に中日新聞にて報道されました。



の安全と未来をまもる対話フォーラムあいち。名古屋市を拠点に活動する産婦人科医の伊藤加奈子さん、女性企業家の育成に取り組み鈴木世津さんが新団体を立ち上げて初開催した。基調講演では、名古屋大学院教育発達科学研究科の河野荘子教授が、交流サ

性暴力子どもどう守る?
 名大で催し SNS介した被害例に学ぶ
 デジタル社会に潜む性暴力から子どもたちを守るため、最新の情報を専門家などから学ぶイベントが25日、名古屋大東山キャンパス(名古屋千種区)の施設「コモンスペース(コモネ)」であった。写真、教育や子育ての関係者、学生ら約100人が会場に参加し、話し合いを通して理解を深めた。
 題して「こどものいのちの安全と未来をまもる対話フォーラムあいち」。名古屋市を拠点に活動する産婦人科医の伊藤加奈子さん、女性企業家の育成に取り組み鈴木世津さんが新団体を立ち上げて初開催した。基調講演では、名古屋大学院教育発達科学研究科の河野荘子教授が、交流サ
 SNS介した被害例に学ぶ。子の性被害を解説。高校からSNSを始めたAさんが男性から優しい言葉をかけられるうちに写真を送ってしまい、相手の要求がエスカレートする典型例を紹介した。「本人の自覚が薄いままに被害者となることが多い」と指摘し、性に関する
 拜太さんは「ニーズが高まっている性教育を必須にするべき。学校に責任を押しつけるような今の制度はもどかしい」と発言。生命の安全教育を担当する同省の男女共同参画共生社会学習・安全課の中国和貴課長は「制度を作る側が説明する場面で根拠になるのは当事者の声。一番力になる」と後押しに感謝した。
 次回は7月、キャリア教育などをテーマに開く。(小中寿美)

10. 謝辞

第1回「こどものいのちの安全と未来をまもる 対話フォーラムあいち」の開催にあたり、温かいご支援とご協力をお寄せくださったすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。

本フォーラムは、子どもたちのいのちの安全、からだところの尊厳、そして未来を守るために、教育・医療・行政・警察・福祉・企業・大学・市民団体・若者など、多様な立場の皆さまとともに対話を重ねる場として開催いたしました。

本事業の意義をご理解いただき、開催を支えてくださいました公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン様には、企画段階から当日まで、貴重なご助言と励ましをいただきました。深く感謝申し上げます。

また、ご多忙の中ご登壇くださいました文部科学省・中園和貴様、名古屋大学大学院・河野莊子先生、兵庫県立大学・竹内和雄先生とゼミ生の皆さま、愛知医科大学・大橋渉先生、NPO 法人虹色のたね・池畑博美様、さくらい助産院・櫻井裕子様、愛知県警少年課・中森良則様、名古屋市教育委員会・津田淳一郎様、名古屋市子ども青少年局・佐々木律子様に、心より感謝申し上げます。

さらに、ランチのご提供とご講話を通じて、食と地域の視点から本フォーラムを豊かにしてくださった TOMO Caffe・早川友子様、Dragon Brewing・杉本有優様にも、厚く御礼申し上げます。

そして、勇気を持って自らの言葉で社会への提言を発信してくれた中高生・大学生の皆さん、会場をご提供くださいました東海国立大学機構 ComoNe 様、運営にお力添えくださったスタッフ・ボランティアの皆さま、そして当日ご参加くださったすべての皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。

第1回で芽吹いた対話のつながりを、第2回・第3回へと育みながら、愛知・名古屋から、子どもたちのいのちと未来を地域全体で支える歩みを進めてまいります。

今後とも、IKOKO あいちの活動にご関心をお寄せいただき、ともに学び、考え、行動していただければ幸いです。

いのち・からだ・こころネットあいち (IKOKO あいち)

代表 伊藤加奈子

副代表・事務局 鈴木世津 (femUniti 株式会社)